
もう一人の死神代行

水風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の死神代行

【Nコード】

N0422Z

【作者名】

水風

【あらすじ】

藍善の反乱から5ヶ月がすぎ、何事もなかったかのように過ぎていく時間。

しかし、突然現世にまたもや事件が！

（一護が死神の力失ったとかは無視してね！）

死神代行黒崎一護！（前書き）

いつものように、虚退治に終われる死神代行黒崎一護。しかし、突然の出来事であった後ろから突然切れ。

瀕死状態となってしまった一護。しかし、魔法を使う一人の少年に助けられるのであった。

死神代行黒崎一護！

「仕方ないな、こんなところで使う事になるとは、思わなかったなあゝ吸い込み開始！」

そのかけ声とともに彼の手の平へと吸い込まれる一護。一体この少年は何者なのか？

時間が過ぎていき、6時間後。

「ん？ここ、どこだ？何も見えねえ。なにかに閉じ込められてんつておわゝ！！！！！」

一護が、またもや吸い込まれ、彼の手の平から出てきた。

「つててて！つてここ浦原商店か！？なんでここに？つてあれ？そういうえば俺誰かに切られたような？」

「あゝ？」

とつさに一護は振り向き、後ろを見た、するとそこには知らない小中ぐらいの少年が立っていた。

「お前、誰だ？」

「えゝと、たまたま通りかかった人ですが、その格好は死神？ですか？」

一護は驚いた、こんな少年が死神の事を知っているなんて思いもしなかった。

「彼は、あなたを助けた人ですよゝ黒崎サン。」

自分の名前を呼ばれた一護は、またもや振り向くと、元12番隊長長ならびに、初代技術開発局局長、浦原喜助が座っていた。

「浦原さん！　つて俺が助けられたつてどういう事だ？てゆうかこんなひよろひよろなガキに俺をおぶつてここままでくるつて無理な話じゃ！　つてこいつ！死神の姿が見えてんのかよ！？」

今頃気づいた一護をほつとして浦原が話を続ける。

「彼はおぶつていったんじゃないくて、空間移動能力を使って手の平に吸い込ませ別次元に飛ばし、それでここに戻したつていう事です

よ」

一護は話しについていけなくなり首を傾げた。

「つまり、あなたを手の平のどこでもドアを使って別の場所に移動させてここに移動させたっていう感じですかね？」

何となく状況を理解した一護は、この少年が何者なのかが分からなくなつて来て、とりあえず問い掛けた

「お前、何者だ？」

そう、問いかけられ、自己紹介をした。

「僕の名前は、水谷紘。魔法が使えるのが特殊能力で、別世界から来た。僕の住んでいたのは地球だったけどある組織に招待されて、今はそこで暮らしているんだけど上からの命令でソウル ソサエティの手伝いに来た。てゆうかさつき来たばかり何だけど…なんだかあなたを別世界へ移動させている途中でなんだか、とても気持ちよい感覚になつただけ…」

一護は、その気持ちよい感覚とゆうのはとりあえず後まわしにして、その別世界の事を聞こうと思ったが、浦原に先をこされた。

「そうそう、それでさっきの話の続きなんです…」

ふと思いだしたように水谷が表情を変える。

「ああ、僕が来たところは、ミッドチルダというところで魔法文明が発達していて、僕はその魔導師として働いてですね、それですね。僕達はリンカーコアっていう霊力の源のさけつみたいなものです。まあだから死神の姿が見えるというわけです。」

かなりの話しの長いもので一護はさっぱり分からなくなっていた。

浦原は理解出来たようだ。

「あ、そうだ、これ渡したいんすけどちょっとこっちに来て下さい。」

一護はふと、気づき、さっきの気持ちよい感覚の正体を考えていたが、すぐにその必要が無くなった。

なぜなら、

彼が浦原の杖によって魂が抜かれ、その姿は

死神だったのだから。

死神代行黒崎一護！（後書き）

新しく書きました。

B L E A C Hと魔法少女リリカルなのはのコラボなんですが、なのははやてが出るのはまだ先という事になってしまいましたが。

もちろん水谷紘ってオリキャラですよちなみに読み方は「みずたにひろ」となりますが、ラーメン食いながら適当に付けた名前です。

いざ勉強会！（前書き）

異世界からやって来た少年に助けられた死神代行黒崎一護。しかし、その少年にもう一つの力があつた。

いざ勉強会！

「うわあああああ！！僕がもう一人いる！てゆうか動かない！？しかもこの刀にこの黒い服ってまさか…？」

「死神っス！」

かなり動揺している水谷にあっけなく答える浦原

「浦原さん、普通の人の死神化ってあんのかよ！？」

一護は今自分が質問出来るただ一つの質問だ

「無いっス！」しかし、死神化した理由は二つ、肉親が死神の場合、黒崎サンのようにね、もう一つは、死神からの死神の力の譲渡、これもまた黒崎サンと同じっスね。」

一護はあっけなく答えられたがまた一つ質問が増えたような顔して、また浦原に質問する。

「じゃあ、肉親が死神って事か？」

「それはないです、なぜなら、肉親が死神ならば、霊力があるはずですしね。」

一護は一瞬顔を緩ませたがようく考えて見ると、まだ納得がいかなかったため、さらに質問する。

「じゃあ、どうやって死神になったんだ？死神からの譲渡でもねえし。」

浦原は少し考えこむかのように少し、頭を下げ、すぐに、顔上げた。

「黒崎サン、これは死神の譲渡っスよ。」

一護はもう意味がわからなくなり、少しの間考え込みまた質問する。

「じゃあ、誰からだ？」

そう質問したが、浦原の返事は、「あなたの事を一番よく知っている人物です」と言われ、色んな死神を思い浮かべるが、全く思いつかない。そんな一護に浦原は、「あたしのかなり近くににいる人っス」といわれ、頭を整理してみる

まずここにいるのは、一護、浦原、水谷の三人であり、水谷はまず

違う、一護もまず譲渡はしていない、浦原は、あたしの近くといった。これでは全く分からない。

「しょうがないっスねえ。彼に、死神の力を譲渡したのはあなたっスよ、黒崎サン。」

「俺は、そんな事した覚えはねえーぞ!？」

「彼はどうやってあなたを運んだんでしたっけ？」

確か、別世界に飛ばしてどうのこうのだから、と言葉を探そうとしたらいきなり。

「そのとうりっス!」

「俺まだなんも喋ってねえぞ？」

この時すでに話が全く分からない水谷は、黙って聞いている。

「そうそう、この話はあたしもこれ以上答えられないんで、あたしの考えを述べたいんスけど、いいっスよね？」

「ああ、も…」

「わっかりましたア!」

さつきから全て、自分がいい終わる前に、全て言って来る浦原に少タイライラしてきた一護だが、とりあえず浦原の話を聞く事にした。「あなたにはこれから、修行してもらいます、嫌といってもムリヤリやらせますがね!」

「(僕に選択肢はないんだな。)」

そういった後に浦原は何か思い出したような口振りで変な薬品を一護に見せる。

「なんだよ、これ？」

「とりあえず見て下さいっスあれを!」

しかし、一護向いた方向と、浦原が指を指した向きは、ただのふすましかない。

「どこみてんすか?こつちですよこつち。」

「(畜生オ!!!)」

マンガであれば、リアル一護になっているほどの声を心の中で言う。「ちよっとこれ飲んで下さい!」

一護は目を丸くして見た、なぜなら、

色 青

中に入っているもの 変なほこりみたいなもの

匂い 理科室

だったからだ。一護は拒否したが、浦原がムリヤリ飲ませようとする。

「や、止める！」

「いやっス」

「俺は絶対飲まねー！」

「何かに誓ったような口振りっスねえ」

「ちよつとまで浦原さん！それ、何かを俺に言わそうとしているんじゃない！」

この時一護が思ったのは卍解の会得の時に斬月に言った結構かっこいいあの言葉である。

「じゃあその言葉、言って下さい」

「それは言わねえよ！」

即答で一護は答える

「言わないとクラスメイトの記憶を操作して、毎日コンさんみたいな事をしていと思わせるさいみ……」

「分かった！言う！言えばいいんだろ！？言えば！」

「それがいやならジャステイスハチマキのやつでもいいスけどねえ。」

「

一護も、もはや突っ込む気力も無くなり、言う決心を決める

「俺のたまっつ！おわあああ！！！！！」

「どうすか？おいしいっスか？」

一護は「魂」よりも恥ずかしい「たま」で区切ってしまい、しかも浦原に変なのを飲まされたのだ。

「な、何すんだよ！」

「あ、そうそうこっちのも飲みます？今のやつよりも改良したんスよ」

「違いは？」

「ビタミンCがはいって…」

「いらねえ」

ものすごい上機嫌な浦原とは別に、変なのを飲まされた一護は、気持ち悪くて仕方がない。

「さあ、それじゃあお勉強会でも初めますかね♪」

「ああ、はい、よろしく…お願いします」

「それじゃあ日程を發表しますかね♪黒崎サン！あそこの引き出しの上から二番目の戸に普通の紙が入ってるんで取って来て下さい」
そう浦原から言われた一護であったがまたもや浦原のフェイントに引つかかってしまい、上から大量の猫缶が落ちて来て、生き埋めになってしまう。

「夜一さんのやつこんなところにあんのかよ！？」

そう、いい浦原のほうを見ると二人ともすでに、地下の勉強部屋に入っており、更なるフェイントに一護はかかってしまう。

「ちくしょうー！！！！！！！！」

いざ勉強会！（後書き）

ギャグをちよつと入れてみました。

ちなみに、次回から死神図鑑パープルをやります。死神図鑑ゴールデンとまったく同じものですが、まったく同じというのは話じゃないですよ。

死神についての説明会

「くっそー！俺を置いていきやがって。」

一護はいつの間にか勉強部屋に入った浦原と水谷に追いつこうと、全力で瞬歩を重ねていくが、そこに浦原達の姿が無かった。

「あれ？おっかしいなあ？」

すると上から、浦原達が降りて来て一護の上に乗っかる形になる。

「お、おもーい！！！！！」

「すいませんねえ黒崎サン。もしかしたら勉強部屋の畳開けたまんまで先に来てると思っちゃいました？それなら大成功っス！」

一護は最後のほうがかなり気になり、聞き返す。

「大成功っス？」

「大成功っス！」

「おい？」

「はい？」

「どっかに隠れてたのかよ？」

「黒崎サンが認識出来ていなかったただけっスよ。30番台の鬼道でここまで引つかかるとは、いやあー！！大成功っス！」

一護はたった30番台の鬼道にあわれに惑わされてしまい、かなりの屈辱を得る。

「それじゃあ、黒崎サンと水谷サンの勉強会を始めましょうか！」

「なんで俺も修行しなくちゃ行けねんだよ！？」

「だって、鬼道使えないなんて、おかしいでしょう？黒崎サンの霊圧なら80番台以上も楽勝でしょう。でもそれは、霊圧のでかさだけ。霊力をうまくコントロールしなければならぬ。例えば、石田サンのようにね！もう一度言います。石田サンのようにね！石田サンと黒崎サンの霊圧のコントロールなんて月とゴキブリじゃないっスか！もう一度言います。石田サンのようにね！念のためもう一度いいま……」

「言わなくていい！」

やってやるうじゃねえか！石田なんかに負けるかよ！」

「（相変わらずっスねえ。）」

一護はとてやる気であつたが、浦原にコンに任せきりだから、一度出直して来いと言われ、しぶしぶ家に帰り、5分で戻つて来た。

「浦原さん、コンを家に置いてくとあぶねえから、俺の体ごと持つて来たんだけど。いいか？」

「ええ、もちろん。で、それならご家族にちゃんと云つたんスか？どこに行つてるとか。」

「ああ、友達んちに泊まるつて云つた。」

「なんか…処女の外泊の言い訳みたいっスね…」

「殺すぞ…！」

早速特訓に入る前に、水谷が質問する。

「てゆうか、なんで修行するんですか？」

「死神達の手伝いに来たんだ。それに、君は運の良いことに、オレンジ髪の不良から死神の力を分け与えられた。」

「不良じゃねえ！」

そんな一護を無視し、話を続ける。

「死神の仕事は2つ。まず、といっても、まず、霊の種類からの説明っスね。」

一つは、「整」と呼ばれる、通常の霊、普通の人がいう幽霊はほとんどこれと言つていいでしょう。

そして、死神が倒すべき、悪霊、それが、「虚」と言つものです。生者死者を襲い、魂を食らう。それが虚です。

そして、死神の仕事は2つ。

一つは、整を「魂葬」と言つもので、ソウル ソサエティに送る事、簡単に言えば、成仏させる事です。

そして、2つ目が「虚」を昇華、場合によっては、滅却する事、たぶん聞いていると思いますが、滅却された虚は、消滅すると、ですが、正確には、消滅するのではなく、記憶などを失い、ブランクと

言われるものになり、記憶はシネンジュと言われるものに分けられ、ブランクはその内、普通の整に戻ります。ですから、安心していいんすよ。でも、あんまり滅却すると、世界のバランスが崩れてしまいますから。なので、出来るだけ、虚相手に鬼道を使わないで下さいね。まあ、使ってもいいんすけどね。まあ、でも、こういうのはクインシーに言う事なんすけど……」

浦原の話が終わり、一護が質問する。

「なあ、確か死神の力の譲渡って、ダメな事じゃ無かったか？」

「問題ないですよ。実は、山元総隊長から連絡がありましたね。もともと、彼に、死神の力を譲渡する予定だったんす。なので、大丈夫っすよ。」

一護は納得し、浦原が修行を開始した。

死神図鑑パープル

一「あれ？水谷ってどっか泊まるとこあんのか？」

水「ええ、もちろん、実は、石田って人と、井上って人と、茶渡って人が、協力してくれるみたいで。」

一「（石田の場合は）」

雨「これを着てくれ！どうだい！この全て白のクインシーの衣服！」
こうなるな。

井上の場合は

井「ご飯出来たよ！わさびとはちみつのたいやき風ラーメン！」

こうなるな。」

水「どうしました？」

一「出来るだけチャドの家か、俺の家に来い！」

死神についての説明会（後書き）

久しぶりの投稿で、思わず死神図鑑パープル忘れてしまつところでした。

感想や誤字の報告、アドバイスなどお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0422z/>

もう一人の死神代行

2011年12月10日19時54分発行